

超人伝—格闘技編

敬称略

40 数年前、ある雑誌に「近世最大の達人は、**植芝盛平**翁が衆目の一致するところだろう。」その理由は、5 メートルの至近距離から拳銃を撃たれて「首をヒョイと傾けて」銃弾を避けた、という事実である・・・云々とある。ボクは、当初彼が大正時代に大本教に帰依していたからだと思っていた。(大本教は、大正 10 年と昭和 10 年に官憲による徹底的な弾圧を受けた新興宗教である。大正時代末期に満州からモンゴルまで布教に行ったり南洋諸島の開発をしたりしたのだが、それよりも心霊現象では特異な存在であった。大本教については稿を改めて書く予定である。) それより以前の日露戦争のときにも、銃弾が飛んでくる前に白い光のようなものが先に到達してその後から銃弾が飛んでくる、と述懐したのを知った。合気道の技もそうであるが、「一番かどうか」については評価が分かれるところだろう。師匠は大東流合気術の**武田惣角**で、大本の神苑で個人教授を受けた。

むしろ、不世出の達人「**塩田剛三**」の方が、「合気」と言う面ではすぐれているのではないかと感じることもある。(後述)

空手道においては、**大山倍達**が人類の限界に挑戦したように思える。「カラテ馬鹿一代」は壮大なフィクションであったことから、少し割り引いて考慮しなければならないが、フル・コンタクト（実際に身体に直接打撃を与える。寸止めなどなし。）だし、その実力もとびきりだったのは疑いもない。ビール瓶切りは事実だし、親指だけで指立て伏せをおこなったのも事実である。真剣白刃取りも本当だろうし、40 年前の K A R A T E という映画も本当だし、あとは、「大山倍達正伝」に詳しい。まあ、常人離れしたパフォーマンスで有名である。いわゆる K 1 のルーツである。亡くなられてから、家族と後継者とが揉めているらしい、という話を聞いた。

少林寺拳法を日本に伝えた**宗道臣**も、最初はその強さを証明しなければならないから、チンピラ 10 数人を数秒の間に蹴り倒したという。見ていた弟子が「その速いこと！」に驚きを隠せなかったという。少林寺拳法の特色は人間の一番弱いところを攻撃するもので、空手道のように突いたり蹴ったりだけではなく、関節技や逆をとったり、思わず目を見張るような技の連続とそのスピードである。・・・ものすごく牽強付会でも非難を覚悟で言えば、空手道と合気道を足して、なおかつプラスアルファがあるのがこの拳法の特色である。

以上の三者に共通するものは、10 数人を相手にみるみるうちに全員を倒したこと、弟子に有能なものが多く輩出していること、身体がそれほど大きくない、むしろ植芝翁など小柄であること、などがある。

植芝盛平の弟子の塩田剛三（シオタ ゴウゾウ）など小柄だが、米国での指導・デモンストレーションなどインターネットの動画に残されているから、今でも見ることができる。一度だけ、TVの画面で今から10人が攻撃するのを防ぐのを見せると言って、まるでスキップするような軽やかなステップで攻撃側がフラフラになったのを見たことがある。塩田は、木村政彦と同期（実際には2つか3つか年長なのだが、同級生になった）でひとり木村を庇い続け、晩年に到るまで「木村を輩出した拓殖大学」は木村をもっと自慢にしていと語っておられた。是非動画をご覧ください。（勧めた女の子全員が感動したのだから。）彼の極意は金魚鉢の金魚の動きを8年間観察して合気の奥義を得た、という。合気道は女性でもできるから軟弱と思われがちであるが、塩田の道場はもっとも厳しい稽古で有名だ。

以上の3人ないし4人が戦後の格闘技界の代表だろう。ところが、植芝盛平には師匠がいる。明治から大正・昭和にかけて活躍した大東流合気術の武田惣角である。身長は140cmくらいだったらしい。上述の3人は戦前から戦後が全盛期であるが、武田師範は明治から昭和にかけての達人である。北海道のやくざ組織2万人を束ねていた親分がコテンパンにやられてしまって、頭があがらなかった。・・・もともと大東流合気術は、会津藩にのみ伝わっていたもので、お留技であった。その後継者が**西郷頼母**で、柔道草莽期の西郷四郎は、西郷頼母の養子であった。頼母からみたら、逃げられた弟子である。武田惣角のみが後継者として残ったのであるが、合気道によって多少の誤解をうけたのは仕方がない。で、この大東流合気術の後継者は、**佐川幸義**である。もう物故されているが、質問されたときにしばらく考えて、誰かに負けた記憶がない、と語った。袖に触れるかどうか、という場面でアッという間に投げられる。投げられた連中がなぜ、どのようにして投げられたのか、ついにわからず、佐川とともにその技まで消えてしまった。高弟同士が稽古をしていると、相撲を取っているようなものらしい。佐川がまだ若い頃に植芝翁を試したことがあり、どうも彼のいう「合気」には到達していなかったらしい。武田惣角の晩年にもしばしば試し、意地悪をして？なかなか合気術が使えなかったという。

武田惣角のご子息が網走で道場を開いておられるそうである。その力が佐川幸義を超えるかどうか知らない。

われわれの知らない古武術もあるだろう（八光流・竹内流・双道流その他）が、どうやら大東流合気術がもっとも目立たないが、もっとも強かったらしい。晩年、負荷をかけて心電図をとるとき、「少し運動してもらわないと」というと、その場で腕立て伏せを 400 回したという。残念ながら、動画がのこっていないため、その実力のほどを知る術が失われてしまった。一説に、その場の流れで、2800 以上もの変化技があったといわれている。

このあと、いくらでも強い人は現れてくるだろうが、この 6 人の伝説は消えることがない。